諸河院図帳

1

特別
イ 4
3163
58(3)

14
3163
58(3)

御門院百首和哥下目録

濃州飯沼氏
長佐収藏書

戀

初戀　公不戀　不會戀　物逢戀　後朝戀
會不逢戀　離戀　思　忍思　恨

雜

曉　松　竹　苔　鶴
山　河　野　岡　橋

海路　旅　別　山家　田良
懐舊　夢　無常　祝　述懷

993

堀川院百首和哥下

憲

初恋

公實　思ひそめしこゝろの中にてかなしきものを折ふしの過
匡房　思ひわまりふるてゝ物思ふ袖にあまるなみだ
國信　行すゑ中八幡てゝ七日社八つ手幾もしらのあつまり
師頼　思ひあまりとちらひてゝ物をいはんこゝろ八ちはやふる
敦家　思ひあまりいひ出ぬ池水のあふ紀の袖人のまるる
仲實　ひとりさねやあつまの吹きのいとゝ思ひ乱れ
後教　なみだ人のもよ程ゆゝしき恋を思ふ

[illegible] 師時
[illegible] 肥仲
[illegible] 基後
[illegible] 隆源

[illegible] 肥後
[illegible] 紀伊
[illegible] 河内

人丸の歌

[illegible] 師時
[illegible] 肥仲
[illegible] 基後
[illegible] 隆源

[illegible] 肥後
[illegible] 紀伊
[illegible] 河内

[illegible] 國信
[illegible] 師教
[illegible] 肥孝
[illegible] 仲実
[illegible] 後教
[illegible] 師時
[illegible] 肥仲
[illegible] 基後
[illegible] 隆源
[illegible] 肥後

今はぬ恋まさりけるとゆんとかぎりあて　紀伊
ちりもしらぬ初秋の風やあひの風　何内

不會恋

ひはりくもとうやあ[illegible]ぬ[illegible]神ゆゑと　公実
ゆゑもてのかみもこのくれぬ海のうへ　宣房
かぎりなき天照神の宮ぬ[illegible]ぬ君　國信
ふるまはあわのうこのふけせひあてやうの[illegible]　師教
我恋は吉野くもの奥たれやはひへもあるへき　影季
あらなくに何ゆゑ[illegible]ぬ人　仲實
ふ事はくるれのとゆゑ[illegible]ぬ　後教

うとんむとよわうぬ[illegible]くれの[illegible]　師時
錦木の千束の数をたてそ[illegible]　肥仲
第木のあらぬ相ゆへ[illegible]　基後
[illegible]なき世[illegible]　澄源
雅面[illegible]ひこやてもこ[illegible]　肥後
徒よわてそ[illegible]　紀伊
見ぬ[illegible]月[illegible]男[illegible]　河内

初逢恋

人まて錦のひもをとくそ初てのとけぬる　公実
[illegible]人錦のひものとけぬれてうらの[illegible]　宣房

うれはしきせんとうのはあはぬ限りのいきうち　國信
さうさとあひるとあひるとは社のかりのやもまぬ鴨　師教
播方さうしみくのこそ夜もすがらとこ夜もすがらあの　孫重
武蔵野よ我恋あゆひ若草をひきそめてのとくへや　仲実
あのやうもとこおひのうしひきくもおひ　後教
いくとせよ我ゆんけうわもさひ君よかくく　師時
下ひものおとけめまハあひそめのと青そ衣ゆ　孫仲
こ語江の八そよおもう恋の恋ゆ人をもわひ小　基後
奈絵乃ひとの八語まひとと青そこゆ逢坂の　逢源
いかりく折と寄あんとくまむしまわしつゆ蛭　肥後

清きなさに思ひあはめを鶯を思ハ嫉妬ハ　紀伊
いなせん雪の下みちうけそよ流ちん中社恋人　河内

後朝恋

なくこ者るうさ社かられあ小さうゆうる紀と朝の恋　公實
紀士のおりどそれこうれ輝あけつゆ涙ハ言ゆ　定房
露ハ社ゆあさえのいくうゆ志ゆ涙ハ寄ゆ　國信
陽ハさの朝寝ハけさ衣千ハひゆ涙まりへきゆち社　師教
恋さに我ゆそそゆく濡ゆへきた小朝寝のおさて　孫重
石ゆこのゆふゆせ衣布ゆうくよあひこそ教あゆ　仲実
問ゆか誰もさ社とハ志ゆあんけさ志もあんよハ　後教

わきもこかあかもし恋のかくさ浪にさへそ袖ハぬれまさりける　師時

かへりつるしのゝめの衣（袂）ハ露けくそひて暮まつ袖（袂）のまちにくれん　顕仲

しのゝめさてはなとや八重ぬる袂へハ文こそわかれなく（わきさう）　基俊

いつのまに恋しかるらん白露のおきてくる人ハ明ぬらん（置）　滏源

朝河のせゝの白浪よるハあけぬと河（ぬれ）と急かしきに（袖の）　肥後

あひみての朝の恋よりも風待し月日も行するぬ　紀伊

昨日まてたのましニハ物すそてけさ恋ひ物思ふ（袖）　河内

逢不逢恋

結ひぬるわたるころ秋の野の草のよわるまゝ露も（ねられぬ）　公實

志らぬるにゝ七日まて世は布ハ常にもわかぬ袖もぬれ（ぬれし）　匡房

あひみてもわかぬ恋せる人の文も見ハ我為てこそ思ひしれ　國信

今更に恋路にまよふ身を歎く何度まよふ人さへの（歎）　師頼

袖もさけ出ひもとくれ来し一夜ハ逢夜（紐）　顕季

又いつと頼めぬらん小車の錦のひもハとけしもを　俊實

山橋の苔のかゝる行すゑかけしを恋（歎）　俊頼

しのけしや山路ふみ見し事そあかぬ涙さへ人の浮ふ（ささう）　師時

さけなりし昔の事に恋しさハ頼絶たる志かな　顕仲

留竹のわかわさ涙の世中やおもひやるの沼　基俊

人しれてよかせハ中くにおもひそめけりも涙と揺（袖）　滏源

積りもこひし忍ふ数なる今宵もしらぬ中さ（露）　肥後

うきたびのよりのこし人はあれど公のみとゞまりやとも逢はれぬ恋　紀伊

逢坂の関を越えし東路のたびとは又まさりけん　河内

旅恋

獨してかり寝の床に鹿ぞ鳴く草の枕よ　公実

逢ぬまの夜なく袖ぞしほれけり恋しき人の夢ぢ絶えつゝ　匡房

ふる郷の行衛も知らぬ旅ながらおもひ出づれば恋しき獨ねや　国信

旅まくら草むすぶとも露けきを恋しき人のしるべ(?)ともがな　師頼

別れ路は浅からぬものを旅の空山の霞に袖ぬらしけり　顕季

海づらにうつす月を見て秋風吹く秋のよるの夢ぞ絶えぬる　仲実

恋しくは旅ゆく人のやどりこそ旅の夢路ぞかなしかりけれ　俊頼

わかれての枕の塩をぬらしてぞわがたびは　師時

其衣ぬれさへつる袖ならぬ夜半の袖をわすれぬ　顕仲

家にあるいもをこふとて草枕旅のまくらに恋しかるらむ　基俊

藻塩焼く浦にて秋旅の我ぞ恋しき　隆源

しほやく海士の袖や旅の空波のよるよる恋ひわたる　肥後

逢事をたえての後ぞ旅の空つゆけき夜は恋しかりけれ　紀伊

旅衣かさねて見れど恋しさは我が身にしみて夢もむすばず　河内

思

獨ねて我おもひ路の恋しさにつきぬ思ひの果てぞ知らぬ　公実

渡門を舟のたえぬ思ひの緒絶えぬるかな　匡房

[illegible]

國信
師教
仲実
後教
師時
[illegible]
仲実
後教
澄源
[illegible]

うちはらひ中比の書きさハ物語ねハ[illegible]
山川のたよハ書に流つゝ思ひ強をぬるの書れ　紀伊
河内

片思

とけしたる君ゆゑ物思ふ名のあれのひとゝ[illegible]　公實
ひとりきのこゝ初見よりこゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　定房
いかゝなるもの計ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　國信
忘れ我人社のこゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　師教
かゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　[illegible]
[illegible]れハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　仲実
[illegible]見ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　後教

志ぬ計物も思はゞ情あるさへ今ハ身なくもなるらめ 師時

いかなれバ命のつらさ残せらく我のミ獨なげくなるらむ 顕仲

ありし名残もわりなき玉の緒の行末をこそ浪かけ 基俊

わすれぬをこゝろと物をたのまれや恋ぬ命を何思ひの為 隆源

心強くもあはせぬ命をしらでよそのちぎりをまたしらや恋しさに 肥後

涙もろきにかに秋ハの行思ひしまたく袖をぬらしれバ 紀伊

我なからあまりもやつれや思ひぬ命を忘れんとよ 河内

恨

やくもえれバ外ひくさ山の葛の葉の恨ともなき秋風ぞふく 公実

忘られやあまのこゝろやいかにちぎりしも契たえぬる 匡房

恨みしハひたすらわかれし人命をとらで涙ちるらや 國信

逢へぬる命の絶えても忘れずもあふこともしらぬ恋ハかなしかる 師頼

思ひしる人もあらじな恨ても衣恨むれどもしら命の色 顕季

たえねこそ身ハ頼まれぬ中のちぎりとも君が心の移りけるかな 仲実

何事もこのむとたのまし我心をつれなきのぞむ涙のよそめの哉 俊頼

さる浦や志賀の浦風いとめしと思へバひもたれぬる 師時

君がため涙あまりのすゑやのちの桁しらせぬ袖のつゆ 顕仲

命なれぬをあめのあふさもまさる志のさみしる涙かな 基俊

うらみしはしらで今もあひしらぬ人をまつこそかなし 隆源

浦のあさんの磯の唐衣ぬれもあるしも袖のぬれしも 肥後

我からといひし忘れた葛原のしれてうらみられぬるかな　紀伊

里とをくとはるゝもみくまのゝうらみのこともあはれ　河内

雑

暁

暁の雨つくゝ聞鐘のこゑうちなかし羽をときく哉　公実

まとゝかて枕に宿のましは名ゝき夢路の行き路　匡房

山路にてそらまかはぬか白露の暁おきに袖のなみたを　国信

草枕旅にし今もなれにけり有明の月ももろともに出る　師頼

山里のかけひの水のたえせすは我まに板間の月そやとれる　顕季

長月の有明の月はよそのゝと羽かく鴫の数きく哉　仲実

明ぬとてけさはおきつる衣手に袖ふりかへしなみたおくらん　俊頼

霜のうへに暁おきに野をすへて薪こるとや山へゆくらん　師時

草枕鴫の羽かきに夢さめてそらにありける有明のころ　顕仲

明ぬなり鴫のはねかき数そひて枕にゆけの雨はたれと　基俊

暁におきてかへれは我門の前田の鴫もたちさはく也　隆源

さゝ櫛の暁ことになりぬらや八重の鳥の羽ならすらん　肥後

思ふ事ある夜の月の暁は人まつよりもあはれなる　紀伊

明ぬなりゆふつけ鳥の声すなりおきて暁になく別せましや　河内

松

塩風にみさりの松はまされたる浦さひにみちゆく吉野雲　公実

[illegible]

[illegible]

武隈の松をみてよめる　師教

[illegible]

[illegible]　仲実

[illegible]　後教

[illegible]　師時

[illegible]　仲

[illegible]　基俊

[illegible]　俊頼

[illegible]　匡房　國信

[illegible]　公実

常盤木の緑はなくてうゝゝゝとしの松をとるは　肥後

いくよせと数もしらねと君か代の神さひよわる松の梢は　紀伊

みかゝるにもけさ岩代の松やあれはむもしの動ん　河内

竹

[illegible]　公実

[illegible]　匡房

[illegible]　國信

[illegible]　師頼

[illegible]　教雅

[illegible]　仲實

星行のうきつゝ雲くゝ成よりわさのこゝろもとゝおを　後教
くれ年ゝ生るまゝ紅の色のあれはそゝ露ゝ玉　師時
富の裾とゝに志ひつゝ行のいとゝこの枝ゝ折ん　別仲
こゝ生の間ゝ紅の星行も秋ハゝ深くゝ成やゝ行ん　基後
我友とゝれそいつゝ行のうきつゝ志けきゝ為ゝ　隆源
本の葉散ゝ毎ゝ日ゝ成ゝ為ゝ行の緑そ　肥後
凡吹ハゝ行ゝ行のゝ志ゝ行ゝ音成　紀伊
世に花とゝ色も行ゝ行を今のゝと思ゝ　河内

苔

さゝ波の数ゝ一世奥山の苔ゝ色ゝ行　公実
海みゝ行ゝ行ゝ行ゝ苔や色ゝ行ゝ行ゝ極ん　匡房
日新ゝ志けゝ行ゝ苔ゝ孫のゝ行ゝ山のゝ行れ　國信
苔成や海ゝ色ゝ行ゝ行ゝ行ゝ苔ゝ行ゝ　師教
雪ゝ行ゝ行ゝ雪の苔遠ゝ行ゝ行ゝ知ゝ行ゝ行ゝ　聚雪
山ゝ行ゝ庭の面ゝ秋の苔遠ゝ行ゝ月ハゝ行ゝ　仲実
薄生のゝ行ゝ宿の苔ゝ行ゝ行ゝ月ゝ行ゝ宿ゝ　後教
行ゝ行ゝ苔ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ　師時
ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ苔ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ　別仲
奥山の岩ゝ行ゝの苔遠ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ　基後
根もいて岩ゝ行ゝ行ゝ苔ゝ行ゝ行ゝ行ゝ行ゝ　隆源

奥山の苔の下松の陰よりや苔の緑もこそ知れ　肥後
ちはやぶる沢の水もたまれる君をよ八千代　紀伊
をかけてわすれぬるかな　河内

霧

霧の立ちまよひ行く朝ぼらけ　公実
沢のうへなる白雲の川の水もしらぬ　医房
縄をいくなるの小舟やへぬらん雁鴨の川の波の音　國信
雁鴨さ行方の雲は山の葉の鳴の波ぬるらん　師教
御門の涼もあるらん御ぬるる波の音を聞く家　別当
白雲を立沢来る波の音の霧ぬるるかな　伊実

細川ぬるる波の涙へるさかれくあけをきれる川の波　後教
君が代の為しるしとぬる田の面をかけ新緑　師時
朝いやとあらぬ沢に出し田面の川の面の音　別仲
高を立の出るの出るやなけとも立よ出る人の音　基後
沢のもしも霧のぬるる袖よ立ぬ歌をもて　隆源
君が代のたち井の浦のしるしとも多を鶴　肥後
天の原立井よ新緑をぬるさけ行く鶴の音　紀伊
千年ぬる田のしるしの池ぬる波の白さへの新緑　河内

山

神こそぬるつき山の高ぬれ知ぬる雲井晴る海の音　公実

朱車おちくにたかにふた見の山のたかさ残空によみ　匡房
浅緑霞て渡る殿まよりこれ見ぬはせ山かれ　國信
見わたせハ来れの雲井ちら掛かくる鐘のおとさやの中山　師頼
峯高く紀伊の郡山におち人ハ朱車ほくたちぬらん　顕季
夕附る日次第に波にあらまよう〳〵見えてもうつせの山　仲実
いく枝おこして〳〵今宵ねすのこゑしく〳〵啼なる　俊頼
優婆塞おこなふ峯の谷川わたる岩根のおもひて　師時
葛城やしろぬさかけて岩かけて雲井をこゆる鏡山　顕仲
白雲の絶まにこゆる鳥かねまでもはるかの山の端　基俊
鳥羽玉の黒髪山のいさゝきハ雲もつれば志るやらん　永縁

白雲のかゝる高嶺にこゝろ指ハいくよかれ行葉まよふらん　肥後
ひさ今〳〵ゆきのせんとやおもふもち秋ハさらなる山まよふらん　紀伊
足柄の山の裾によそさくる嶋のうらわの嶺ハしるす　河内

河

みなかみに紀やこえあけはみわたる淀おちくれ波の白栄　公実
ときよせハひのくま川の雲飛をあさりの雲のなへ行る　匡房
わきて今宵岩瀬の森やすみれ山の下なり川かな　国信
角田川かせこなみの白波のたつ嶋のきりぬ枕かね　師頼
舟もなく岩波高きこゝろ川のなかれくわたる人もなし　顕季
岩ねをしぬぎおもみかけの清きに流の音やさやけき　仲実

大井川みなくちうみ　岩間もしぎの色うつるなりや　後鳥羽

駿河なる月新の宮ゝに藻しほ草　師時

名におつるわたくしの河を家ゝ　教伊

まもり川なるうみの岩ねに　藤原定家

吉野なる大川おつるそのひかせ　藤原

川瀬もそこともたつぬるやうの　教後

なみたかく吉野川なる吉野川　紀伊

いけさも流るれとみなれ川　河内

野

秋の野の草の葉ゝ　公実

ちるうめさて野市はなの沖ゝ　匡房

はるかぜの吹上のをのゝわさちの原　國信

秋の野をいのまに行ハむのうゝくさけ　師教

あつさちる野ゝ草の沖ゝ　教雪

月ゝくあけの東ゝ　仲実

さゆくよんうとゆる宮城の夢　後教

見渡ハ清水も松のゝ家ゝ　師時

旅人の行程ゝ　教伊

ゆうゝ方ゝ　教伊

ものゝ人ゝ　基後

ちるうめて夫の　教家

ものゝ人ゝて野ゝ　隆源

我せこう哥のこゝ面わすれのよ鶯のなり葉くれて　肥後
哥ゆえてはなかゆるかぜ　紀伊
ふるこの方なれて道成寺をもなれて清水を　河内

関

いとく哥なれ時くこゝろ　公実
逢坂の関乃せ紅葉出くみるしもやはかゝさこゆ　遠房
流のとにまこの月成うまもしうはさ風やに　國信
見橋の光紅葉の数なく清乃こゝろ八秋乃せうて　師教
いもうあにくもれみるまひ月うんこの雲乃紅葉　孔雀
きぬ乃色ゝくこゝろ雲橋の名を人ゝ　仲実

いとくしく都恋ゝ夕ゝ浪の実のうきを風門　後教
白川の実や秋ハこゝろん四月新のすゝわろれ　師時
ゝ雲の金にゝ少し越ゝ月の衣乃実成ゝ　孔仲
名ゝ哥ゝ秋ゝ哥ゝ紅もこう我てふこゝハゆ世実　養後
る人ゝ流ゝ強なくに河口の実のくゝめゝ秋乃　逢源
月新の月乃海ゝ月成ハんゝ波の実ゝ流ゝ　肥後
都ゝ月ゝ社やれゝのゝ名ゝなゝれゝ白川の実　紀伊
逢ゝ月ゝくゝ月ゝ月ゝこゝゆへゝこゝ雲成雅　河内

橋

板倉の橋成ハ誰乃海ゝ稲負名ゝ月ゝ　公実

古木乃板も昔ながら計橋よりわたる世々経ぬらん世々の渡しぞ 匡房

うち渡す杖の板橋よりわたれなほも今こそいかゞせん 國信

東屋のたまかの橋をも相浪ハ都までとも思ひたえけり 師頼

東路乃佐野の舟橋かけねどもいかにしてかはこふゆめや 顕季

宇治乃昔もまたわたらは今はれみれ沼に渡る棚なし 仲実

朝夕にかよふ人の橋なれハ踏ならしつゝ久しく渡さぬなり 俊頼

流ゆく人のうちわたす河辺のほとりにもえたちわたし 師時

橋よりわたり今もなほ水の上なかれ渡し波も明ぬ橋 顕仲

我ハ草乃蜂のまゝ途をそこで我ハ見る橋をいふ渡 基俊

世の中の橋乃木乃紀つけく昔の人ハ住ましきを 隆源

さゝかにのくもてにかゝる八橋をいかなる人の渡りそめけん 肥後

渡りけむ昔乃さとハ信濃なる木曽路の橋の跡ハかはらず 紀伊

陸奥の杉本の橋も中絶てふみゝる人も今はなからむ 河内

海路

うきえやの沖津塩まみちくれハいさそへは漕出し(の浦と) 公実

大塩やわたつみのせとの吹風にあらくもなれるなかれん 匡房

浪の打るいつこの浦をいつか舟とも満ちて世をたつる(まさこまさ) 國信

わたの原江嶋か磯にわさわけまちわひし舟まつ世を経(ぬらん) 師頼

いけの浪路遥かに都の空のみそいかゝ 顕季

越の海乃わたのはらかなる浦に舟はこゝにめぐる浪枕(はらんよい) 仲実

浦さしてぬ旅のかりねに出しより明石かたの東へよりこひて　匡房

出まへしまやの松浦にそよかは露ハいつよりか草枕する　国信

さよ中に出るハ月かけ(?)ちの浪わかさかし浪に旅寝のそらかわ　師頼

出ハ出ぬ今の旅なりかりやとりわか衣露けき旅の仮寝ハ　顕季

いくよねぬ白玉よする浦まつかは浜松かえに松葉わけ(?)　仲実

志かのうら月の入山に旅ねしてよのひとつさへぬ夜半かな　俊頼

旅人の枕まとわかぬ末の別ハ中やま常さゝき(?)つゝ月も西ぞあき　師時

さゝ波よする我身ゆゑに思れハさ浜さや海人の釣舟やよきまま　顕仲

初瀬のんかちなる旅寝よハ我宿へそ遠まさくへなる　基俊

草まくらぬさ紀山を出むと急海よおもかせミハしもあまよかか　隆源

ことゝはる松まへよりて泊ま舟のこゝろけにすみやる　仲実

まち兼て浦つたひせし漕舟は奥のみなとに落なん　師時

ゆけさ免も由良のと渡る末舟の漕わかれゆく歌ぞやきこゆ　顕仲

月影に宮のうち鳴く浅渡ハ塩もかなはぬ舟出せよ君　基俊

ともつなに大鳴る風ならす漕出る釣舟ハ今より出べき　隆源

漕舟の波もたかねの塩やゝ櫓やたの音へ聞ゆらん　肥後

船出てこれもあらぬ浜風に波よせてゆくあまの橘　紀伊

風吹ハ急くひもたゝさゝ漕かれぬあまの小舟　河内

旅

秋出てハいく月となく鳴きぬる雲の上に秋ぞ(?)へん　公実

高くよんひとをこめあまるこの花をいくよしをこの　肥後
道をこゝろうちけやめ行末ハ第八拾九首　紀伊
白雲ハ[illegible]　大空を社家と[illegible]　河内

別

ゆかりうん程をもこゝろぬ行ハ交こゝ[illegible]　[illegible]
四海を行人こゝ為社老よりハ別[illegible]　廷房
[illegible]　[illegible]　國信
立別　廿日あまりよ成よりや名社[illegible]　師教
唐衣袖の別乃ゆきこゝ[illegible]　[illegible]
こゝ[illegible]　[illegible]　仲実

和ゝなよ[illegible]　後教
あまの[illegible]　師時
[illegible]　[illegible]
社家の立別ゆゝ君よ[illegible]　[illegible]
ゆりうんたも[illegible]　[illegible]
別[illegible]　[illegible]
[illegible]　肥後
[illegible]　紀伊
思ひ[illegible]　河内

山家

[illegible]　公実

山里はまれの御尋ねとぞ思ふ　　法眼
雪こめて寂しさまさる山里は　　國信
山里は寝覚の床のさびしきに　　師教
月澄の夜ハ八日のさすらはせてそころ　　敬孝
さはるとてうこひもちあの山里ハ藤の門さうやはすら　　仲実
木枯のそこのこうハ山里ハ蘆の門さうやはすら　　後教
雲ゐ遠山ちるねのあられや八月の宿る夫婦引うら　　師時
稀門ハこ蘭よ海さ引さこそ外面の小田ゝくひうら　　敬仲
寂寞こ月澄家よすら山里にいてゝ月の影さうん　　基後
雲さこそ山の人もたずさ山里ハ秋ゝ松さひ引られ　　盛深

山里の秋ハくよちゝ稀ゝ人まれ人ハ空よ虫の音　　肥後
問人もなし秋山里の清月生ハ人のまに秋りこそませ　　紀伊
木の葉のこ黄つ引ゝ山里の初りハ蟲ゝ風よ海せてそ　　河内

田家

よ初ゝりのうちゝハ門田地ゝけて常ゝ家ゝ信わ　　宗実
稲畑の光ゆまゝ海ゝ山田ゝ山ゝ秋ゝ月ゝ　　定房
かゝこひるさ木の色分ゝ秋ゝ山ゝ秋ゝ月ゝ　　國信
我せこハ木ゝ分ゝ秋ゝ海ゝ秋ゝ月ゝ　　師教
小山田の稲ゝの高ゝ秋ゝ月ゝ　　敬孝
秋田ゝ刈ゝ秋ゝ月ゝ稲員ゝの夏ゝ秋ゝ月ゝ　　仲實

秋の田にむら雀ちりしく山嵐を宰も知らずまじひろのよ　後規

むれゐくる田中の宿のいなむしろ我いく袖にまさりくらし　師時

我かくれつ田のひたまおもひきて稲負鳥のちるやさびしん　那仲

こぼれぬる夜ハ稲わきぬる我宿のいなを志る小田を刈こそ比　基俊

宿もせに朝毎いつる稲刈かれ枕にきて縄ゆひてうかへける　隆源

いなづまの外面にちれハ庭もせにいつ田の稲茎打ちらく　肥後

これそめとおもし宿にひきはくやひきぎく山田守こともなし　紀伊

小山田の稲をはせし鳥雁を打拂ひうちそめし一葉青秋志るらん　河内

懐舊

松の戸の柳一本の山人のはなさき世にはたれ咲く花も宿む　公実

櫻木の下ハ今まで忘ぬ人の花の色ハ忘れざりけり　匡房

忘ハ去年の今日まにハ昔わがたまぐる物の衰まもらん　國信

徒に春く浅月日をおくりつまこハ昔浅き志の心ひとつなりけり　師頼

末の代の今をみしとや岩代の那年中の松浅結ハ知らん　顕季

柄よいかり是やいつの橋杭わかれもする代波井して　仲実

乗りとも世いまそぞ今のまきりたらぬ人と昔なる秋　俊頼

さる住ひよの折りてみらんさうとり今にのまき秋のまで是　師時

思ひ出さく秋をかりぬかりそなき昔をむかしとろハ洞々かは　那仲

花らくの数々たひに待ちつみ柳昔秋歌しかられ　基俊

みし宿の庵は浅茅原ときよくわ八藻の苗み荒けして　隆源

月にうへくかうの雲八河ゆうつゝ嘶りみるこのいとゝ遠き　肥後
我人のこゝ方よりとうう古都を今も忘れつゝき　紀伊
五月八ちゝ月ともゝ鶯とゝ鳴ゝ雲ゝ残れやハする　河内

夢

世ゝ雲八野人のゝ月夢ゝうゝ初ゝ夏の中ゝ代ゝ雲ゝ蛙ゝ　公実
百ゝ月花ゝ常ゝてゝ世ゝ八ゝ夢ゝ夢ゝ　医房
中ゝ世ゝ八ゝ夢ゝ人ゝ月ゝ夢ゝ世ゝ月ゝ　國信
ゆゝ月ゝ夢ゝ人ゝ月ゝ蛙ゝ夏ゝ　師教
うゝ物ゝ夏ゝ月ゝ世ゝ月ゝ昔ゝ人ゝ夏ゝ　殿秀
夏ゝ月ゝ人ゝ月ゝ夏ゝ世ゝ月ゝ夏ゝ　伊実

さゝ月のゝ月ゝ月ゝ月ゝ夏ゝ月ゝ夏ゝ月ゝ社ゝ　後教
月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　師時
昔ゝ人ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　殿仲
ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　基俊
沢ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　塗原
ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　肥後
何ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　紀伊
月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　河内

無常

宮殿乃ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ　公実

世のなかをいとふまてこそかなしけれかくなき身のわかれんかなきみの涙 匡房

みそちあまり杉生のすゑみに浦千鳥の音なき世をはかけて契らん 國信

けふ那なき代にのこすへ身をそのこの日数をも思へ(とも契らし) 師頼

額白露斗ある命のそへなくへ思ひへ今日けふなる 顕季

世の中はつねやはあるる君か代の色にまよふる松の緑(ゆる) 仲実

花名川に紀本まつりる浅香のなみたらくれはなかりし(けふさもあれもろ) 俊頼

うけふの末の身か身とも思はしめくあめ世の中 師時

山の鶴に命の限りの数あれ我もさそへ世をはなれぬ 顕仲

世中は我たへふなけくらん山川のうきかけめくる頼とも(や) 基俊

雲露は我のかきにもくしもとてやえかなき世代も(ふりてさらん) 隆源

消ぬまもしえてそ多ものあた芝にかれぬる露を我身とは 肥後

花の散つる木の葉をみるまても世のなかあさきいとなみ(まん) 紀伊

子をもも世代のとふかは捨ひとへおもへぬ身の哀(なる) 河内

祝

君か代の数によくへはたなかしし千世の濱のまさこなりけり 公実

神山のすりに代さしみれは清の瀧川浪や万代のかけ 匡房

松かけに宿つるわきも紀伊の名のおなき代は君かみ命 國信

君か代は長井の浦に澤もすくもれ万寿のよはひかん 師頼

君かためゆくさの緒代さりとさて神そ陰つる万代とさ 顕季

いさなきのにとの時に定さそ我君ひさに代よ申さんさ 仲実

君ヶ代の松の上葉に雪ふりて　千年のうぐいす　後鳥羽

にごりぬ民の流とのわれなれば　君ヶ代ながき　師時

庭さかりなれば　君ヶ代の御さかり　浪や万代　別仲

奥山のやりとの桂　君ヶ代ながいく　度隆成　春後

君ヶ代ぞ　ちはやぶる　八百万代を　千歳　澄源

君ヶ代八百万代の庭さかり　千歳　肥後

何事につけても　君ヶ代ぞ　浪わかち　紀伊

枝ちけき白玉桂　君ヶ代ぞ　いくとせ　河内

述懐

何をして　義さいこん　朝毎に　浪の影を　なげくかな　公実

門前菊　菊の露を　物わけば　蓮の上に　宗房

月にそむ　しかりまして　君ヶ代　世ぞ　國信

為のうきは　ものをも　今紅葉の　雪ぞ　師教

なぞやこは　我為雖の　白山の　雪のうちに　別等

ひまもなる　弱ちわりと　知りけり　世ぞ　仲実

いるれを　我ものしこの　ぬかるく　今　師時

義さえ　人　れ　ぬ　ものと　我　事成　別仲

唐土　人　我　く　ぬ　歌　春後

わさけ　代　ば　ぬ　ぬ　澄源

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　肥後

いくめくわすくしきあわれ春秋にあらしもあらしつろひて　紀経
もみぢは浅きは色も浅の老をともなふ人をまつ風　河内

俊頼

うきみ川　せの岩かと　わきかへり　早き流れは
堰かれても　堰くかたもなく　せかれ行　底のこころを
たのむ事は　もみぢ葉の　流れても　岩に浪は
なかれても　いそぎなき　なき雨の　こえし岸の
ながれゆく　ひとつなき　あけきえを　浪の岩まよ
あすけさも　もみぢ葉は　みさりて　事もなき
なかしさに　春とのうけ　くものも　おさまる袖

くちなてそ　何事よ只　あわれ色も　世の中よ
あとなくなる　うち岩をの　ちりて行く　又とも散り
さくらまの　花ゆへも　さくらひ　事をおきよ
梅に風の　たけきとを　春かなる　うちの花を
杉の風へ　あさの露よ　家来を　みさき事よ
せりつくし　春花の露よ　早くと　我身のよ
なかれても　さびしきの　ちりめり　雲のうへ
つらへこも　たかきの事も　冬この　月のし
都れ旅も　うちの花の　咲かなる　ひけの雲の
いさきよ　雲の山よ　あくれて　このも花に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

反哥

世中乃うきさ[illegible]

[illegible]

[illegible]

従四位上行左近衛權中將兼備中權介源朝臣師時

散位従四位下藤原朝臣顕仲

散位従五位上藤原朝臣基俊

阿闍梨傳燈大法師隆源

肥後　皇后宮女房

紀伊　祐子内親王女房

河内　俊子内親王女房

弱水雲興虎嘯風別

今也聖德溢于四海仁恩及于異域治

教体而日月活澄堂堂之彩民安耕桑

山稼思養海白恵沉献材採彩祭四恵

襲和歌大興治庶人荷簀負粮三三五五

爲之之盡教而下流噫於小虎嘯〻獨

行水源遠火光燦於乾平累代勅撰家〻

歌集麗藻于梓流布於世爲尊有

猶云衛者一日携書来曰此出城河院
と百年也彩摂之信書子分俗習難猶
滝余素学佛教ゝ儀俗典況於和
平治盛時謹望那藤ゝ護已被求書
ゝ考訂之如ゝ添刪以後書子
嘉永庚寅四月望　書堂大學頭

御書物屋　出雲寺和泉掾